

# 大鳥圭介伝

戊辰戦には脱走兵を率いて

百戦百敗。維新後は政府功臣と

なり外交、技術革新に尽くした

一代の風雲児、唯一の伝記



限定三百部復刻

山崎有信[著]

マツノ書店

十月二十五日拂曉大野村を出發し、田間の細道を通つて五ツ崎七重村へ到着した處が、松岡隊弁にブリーネ氏も今朝到着したとのこと兵隊一同休息して居つた、本日は、五稜郭に向ふ見込である、此の五稜郭は武田豊三郎と云ふ人の築城で堅固の城郭であるから、敵は必ず此處を根拠として、多くの兵隊で死守するに相違ない、其處で大鳥都督はブリーネ氏とも相談の上、松岡四郎次郎の隊を先鋒として、大川村を経て赤川村に到つた處が案外里程が遠くて赤川村に着いた時は已に七ツ時であつた、因て松岡隊を神山へ宿泊せしめ、其の餘は赤川へ分宿させた、本日午後大川から赤川に到る途中で箱館津に四天艦が黒煙を吐いて走せるのを見た用返道の兵隊の動静は分らなかつたけれども、無事に進めば豊島津へ着く日數であつた、何れの隊にても五稜郭の近傍に往つたなら山の上で火を擧げて互に之を知らすと云ふことの約束であつたから、番兵の見張を定めて後赤川村の上の山の上で烽火を燃した、口づ方豊三の方へも密使を遣した、さうしてから土人を五稜郭へ遣して動静を伺はしめた處が郭内の兵隊は昨日の朝から悉く逃げ去つて今は一人も居ないと云ふ、夜の四ツ時頃でもあつたらうか箱館から少し左手に停つて火筒が擧つた、是れは津輕の兵隊が其の陣屋を焼き擧げて逃げたのである、瀧川へ進んだ處が陣方に觸つて来て、初て上方豊三が瀧川に到着したと云ふことを知つた、二十六日早曉赤川村を經し木道から五稜郭の方へ向ふた、松岡隊は神山村を發し先鋒となつて郭内に進入つたが、敵は先きに土人の云ふ通り一人も居らず、府知

事清水谷公考は二十四日の夜立退かれ、兵隊も退き残らず引揚げたから、後へは蓋殿などが多く入り込んで種々の物品を盗み取り書置などとは處々に散らして居つた、又兵糧彈藥も瀧山に積み重ね、胸腹の上には二十四斤砲が四門備へてあつたが、砲臺には供し難いので、夫から大鳥都督は一應郭内を巡視の上、火の元を嚴重に取締り蓋殿を誹謗し、兵隊を郭内と郭外の役屋敷とに分宿せしめた上方豊三は、郭の頭郭内に来た御兵隊と陸軍隊とは翌日繰込んだ上方豊三は此の兩隊を率ゐて川返道に向ひ川返村の遊樂場に到つた處が、愛に敵兵が一小隊許り居つたが番兵の競争にもならずして敵は陣上まで引揚げたから、之を通報して陣上を占領し斬獲もあつたが、夫れから瀧川を下り来た、此の時御兵隊は先頭に進入して隨分功績があつた、額兵隊長は尾海太郎である、元箱館の守備兵は津輕兵が五百人、松前兵四百人程であつたが、十月二十二日の頃備後瀧山の兵五百人許り到着し、直に大野村と七重村とへ出張の由、其の外總兵と唱へて五稜郭で編制した兵が三小隊程あつたが、何れも七重、大野の兩道へ出陣した兵が随くも敗軍したから、とても及ばぬものと考へたか瀧山と津輕との兵は府知事清水谷公考へ従ふて箱館へ退却し、府知事は英米の蒸汽船を雇ふて、二十五日の曉、青森へ赴いた兵隊の一部は松前へ歸り、半は直に有川から海岸に沿つて引揚げ知内峠を守つて居るとの事であつた、五稜郭外の役宅に敵の負傷者が六人許り居つた是れは瀧山隊のもの五人と長門遊樂新五郎の家一人とて何れも重傷であつたが當時榎本益次郎は敵米の敵

## 内容見本 (64%縮小)

争の模様なども知つて居り又戰時國際法も一通り研究せられて居るから、負傷して戦力力を失ふて居る者を救済する様な野蠻な行爲はしない、厚く之を介抱し箱館病院に送つて患方の兵隊の負傷と同室に置いて懇切に治療せしめた、此の兩藩の負傷者は戰年の正月頃一人死亡し他は全治したから箱館へ路用の金を與へ、船で徳を青森迄送り届けた、今日では當然の事で別段珍らしいことではないが、其の當時に於ては實に感すべきことと云はなければならぬ。

### 秋田藩の軍艦高丸捕獲の顛末

十月二十五日頃四天艦の船が箱館へ上陸して敵の隠し置いた武器彈藥を分捕した、夫れから二十八日秋田藩の軍艦高丸を捕獲して乗組人の重なる薩人田島敏廣四郎と大府藩人非上千城、二十との二氏を捕へて後に四天艦から騎龍艦に移した稱も秋田藩の此の軍艦は何故愛に奪りしかと云ふに、此の艦は初めアジロウトと云ふ船名で外國人から秋田藩に於て購入する都合で船戸から赤人と秋田藩人山本誠之助、大州藩人非上千城、薩人田島敏廣等が乗込んで秋田に来たが、當時秋田藩は非常に瀧川上四重の地位であつたから金額の幾部を支拂ひ資金は東京で支拂ふと云ふ約束で土師の艦を出帆させた、非上千城の知友英人ボーマー氏なるものが、秋田の軍艦八咫丸沈没の件に關し秋田に来て居つたが、箱館へ歸りたからとて同艦を



今回の復刻版の装幀です(デザイン・毛利一枝)



をして病人は小佐越通から送ることにして、先鋒隊は七ツ時今の午 四時日光を出發した、大鳥都督の出發は燈火し頃であつた、日光から會津領の五十里驛に至るには兩道がある即ち本道と間道とである、本道は今市から小佐越に出て高原を経て五十里驛に達す此の道は牛馬通行の大道である、又間道の方は日光から直に山に入り、山岳を越え日陰村を経て五十里驛に達す、之を六方越と云ふ、何れも此の六方越を越ゆるのであるが、雨後の山路で泥濘膝を没すり許りて一步は一步より困難である、闇は迫る露は置く、提灯の蠟燭さへ盡きたれば咫尺も辨ぜぬ断崖絶壁、一步を誤れば谷に轉げ墜ちねばならぬ、加之、多數の人員だから前も後も混雑で中々容易に歩行が拂取らぬ、半町往ては休み一町行きとは又休む、夫れに一つの手拔りは嚮道を雇はなかつたのである、其處で大凡の方角を定めて深山幽谷を辿りくつて、千辛萬苦の上大凡三里程も行きたる頃真夜中頃ともなつた、是から尙も疲れ切つた足を引づりながら夜の山路を行き惱む、其の慘状は眼も當られぬ有様である、半里、一里と方向のみを定めては足に任せて跋涉しながら彼是れ四里近くも進んだ時、云ひ合せた様に何れも足を憩めん爲め青葉の下に腰を卸した、夜寒の露に濡れまさる戎衣の袖を乾かさんと、傍に落ち散りたる枯木を拾ひ集め火を點じた、戎衣の露に濕つたのを乾かす中に、夜は益々更けた、身體は綿の如く疲れて居る焚火の周圍に團欒して居る、十人、二十人の各組は何れも石を枕とし、木の枝を折つて褥として一眠りしたが、風は時々梢を動かし露は落ちて顔や手足を濡して屢々假寢の夢を破

七八

## 嗚呼大鳥男

文學士 横山健 堂氏稿

横山達三氏健堂又は黒頭巾と號す明治五年十二月五日を以て山口縣萩町に生る、讀賣新聞に執筆し頗る令名あり「新人物記」、「舊藩と新人物」、「大將乃木」其の他數種の著書あり。

大鳥男は逝けり。男の膽勇あり、知見ある人格事業は、蓋棺にのぞみ、滿都の新聞に依て、男の靈前に賞讃せられたり。

男の生涯は波瀾あり、起伏あり、頗る詩的なり。播州の田舎醫者より出て蘭學生となり、江川塾の教師となり、舊幕脱走隊の首領に推され、五稜郭に力戦し、官軍に歸順して、自ら嘗て創建せし牢舎に投ぜられ、萬死に一生を得て、未だ帝都を見ざるに、早くも、海外に派遣せられ、官途に累進して、明治政府の功臣となり、子あり、孫あり、八十歳の壽を保ちて安らかに薨じぬ。

男は戊辰の勇將を以て知らる、敗軍の將は兵を談せず。男の口より、百戦の決心事を聞くを得可からざりし。明治に於ける男の事業は、寧ろ、工藝創意の方面に在り。男の頭腦は打算的なり、男は、初めより此の如き人なりしなり。

男は戦の人にあらず、戦つて勝たず。然れども、百敗して衰へざる意氣の人なりし也。

男は創意に富む。其の江川の屋敷内に在つて、夙に寫眞を試み、築城典型を鉛製の活字版に付せし如き、共に、吾が工藝史に、特筆すべし。

若しそれ、歐米より歸朝後、工學寮に頭として、盛んに、泰西日新の物質的を輸入したるの功勞は、新日本、まさに男に感謝すべき點ならずんばあらず。



## ある敗將の記録——『大鳥圭介伝』

秋山 香乃

大鳥圭介は長い間、損をしてきた。というのも、小説の中でどういふわけか大鳥は、将としての資質に欠け、実戦指揮においては実力が伴わない、そのくせ西洋軍術を学んだ自負とプライドだけは高い、鼻もちならない人物に描かれることが多いからだ。小説だから作者の意向によって人物像は虚飾されるものだが、複数の作家が同じような描き方をしたためか、大鳥とはそういう人物だったに違いない、と信じられた読者も多かったようだ。しばらくこの男の人気は低かった。

それがここ最近、俄かに変わった。本当はどんな人物だろうと、史料を手取る人が増えてきたからである。そういう人々によって大鳥圭介は、逆境に強いポジティブシンキングの持ち主で、明るく魅力に富んだ人物だったらしいと、ようやく実像に近い姿が語られ始めている。

大鳥という男は、薩長中心の新政府に最後まで抵抗を示し、五稜郭に立てこもった榎本武揚率いる箱館政府の陸軍奉行に選抜され、旧幕府軍を指揮して戦った敗將である。明治の世では、敗者としての虐げられた人生が待っていてもなんら不思議はなかった。

が、実際は、明治五年一月までは獄中で過ごしたものの、赦免されてわずか十日足らずで開拓使御用掛に任命され、明治政府から月給百円を受けている。それから一月後には、大蔵少丞となり、外債発行という大任を受け、欧米へ渡るのである。十年後には、年俸四千二百円という大金を給付されている。

かつての敵を取り立てた明治政府が、特別寛大だったわけではない。事実、大鳥ら箱館政府の幹部の処遇は、処刑と赦免が紙一重だった。それが助けられて右記の通りの出世となったのは、ひとえに大鳥の驚くばかりの人脈の広さに起因する。落ちぶれた男に世間がそっぽを向けるのはよく聞く話だが、大鳥の場合、薩摩の黒田清隆を中心に実に多くの知己が手を差し伸べた。そんな人物が魅力的でないはずがない。

では、実像に近い大鳥圭介をかい間見ることができる書物とはなんなのか。それが、山崎有信著『大鳥圭介伝』なのである。

大正四年に発行された本書は、全五編及び補遺で構成されている。

第一編は、大鳥圭介の生涯を書簡や当時の記事を引用しつつ、比較的平易な文体で具体的且つ生々しく描きだす。前半は、戸数僅か十二、三軒しかない小村の医者の子に生まれた大鳥が、いかにして直参旗本まで上り詰めたか。幕府瓦壊後は、自ら育成した伝習兵を率いて新政府軍と干戈を交えたものの、敗戦に継ぐ敗戦。かつて砲術塾で教えた黒田清隆との、変わらぬ友情を胸に秘めたままの師弟対決と箱館降伏が描かれる。後半は、明治という激動の時代を活写する。それは、敗者の名を負った逆境の中で、枢密顧問官、男爵、正二位まで駆け上がった復活劇だ。悪条件をいかにして跳ねのけていったかを読み取るとは、混迷する現代を生きる私たちにとっても意義ある時間となるだろう。

第二編は大鳥を知る者たちの談話集で、そこにいるだけで周囲を明るくした大鳥の人柄が、ほのぼのと伝わってくる。面白いのが、多くの名士が大鳥のことを、実戦下手だが、「誰も悪評する者もなかった」と証言していることだ。「大鳥さんは配下を派して戦はずと不思議に勝つ、自分が出ると必ず負ける」。そして負けたときに、「また負けたよハッハッ」と「にこにこして逃げてくる」というのである。だが、負けた言い訳を一切せず笑い飛ばす大鳥の姿に、多くの兵が萎れることなく励まされ、明日もまた戦えたのだ。

第三編は、「易簣及葬儀彙集」として大鳥亡き後に出た記事を集めて載せてあり、貴重な記録である。

第四編、第五編は、それぞれ「逸事」と「詩歌」だ。ここには大鳥自身が獄舎内で書いた獄中記の一節が載せられているが、狭く暑く臭いと獄舎への不満を散々述べておきつつ、「この牢屋は予が一昨年建立せるものなり」と、実は自分が作った牢屋だと種明かしする下りは、悲惨な牢獄暮らしの中でもユーモアを忘れない大鳥のおおらかさが滲み出ている。また、維新前の若いころ、島津斉彬の望みで蒸気船の模型を作ったり、外国の本を読んだだけで写真の撮り方を会得したりした逸話は、この男の才気を今に伝える。

最後の補遺は、大鳥自身の直話が記され、例えば緒方洪庵の塾で学んでいたころは、みな貧乏で、塾主六十人前後に月給が三、四枚しかなく、みなどで頂ぐり回し着して外出したなど、面白い思い出話の散々



に興味をそそられる。塾生の中には、大村益次郎や福沢諭吉などがいた。また、講演の記録や論説なども万録され、十分に大鳥の思想を汲み取ることができるのは嬉しい限りだ。

乱世を波乱万丈に生き抜いた敗将の生涯を複数の視点で読ませる本書の構成上、どうしても同じ事柄の繰り返ししがくどい印象を拭えぬが、それだけにあらゆる角度から大鳥圭介という人物を炙り出すことに成功していると言えるだろう。きついきほど笑って過ごした男の一生の記録である。今こそ、ぜひ一読して欲しい一冊だ。



■フランス式装備の脱走軍幹部。(『函館戦争図絵』より)

## 大鳥圭介傳略目次

### 第一編 大鳥圭介の生涯

- 圭介出生の地
- 大鳥家の系譜
- 圭介幼時の生立及び閑谷塾に学ぶ
- 圭介郷里に帰り再び出でて緒方洪庵の塾に蘭書を学ぶ
- 大阪より江戸に到る
- 坪井忠益の塾に入り後ち江川塾に聘せらる
- 兵君の翻訳並びに科学的趣味
- 圭介の結婚並びに英学の研究
- 薩州侯の厚遇を受け幕府の直臣と爲る
- 圭介江戸を脱走す
- 市川驛を出発して諸川驛に到る
- 諸川驛を発して小山に戦ふ
- 飯塚村を発して鹿沼驛に到着す
- 鹿沼驛出発並びに宇都宮落城後の点検
- 安塚村の戦争並びに宇都宮城の激戦
- 大鳥圭介宇都宮に敗軍して日光に到る
- 日光を出発し今市驛に到る
- 土州軍と一戦の後会津領に到る
- 都督大鳥圭介軍容を整へ田島驛を発す
- 今市を攻撃し利あらずして退却す
- 大鳥都督今市の敵と烈戦のこと
- 白河城の戦並びに大鳥都督会津にる
- 敵兵の襲来我軍の敗走
- 来襲せし敵兵を大に敗る
- 若松に到り宰相へ面謁し、兵を率いて木地小屋に出陣す
- 大鳥都督石筵口に防禦の事
- 石筵山の大激戦味方敗走す
- 再び石筵山の激戦味方敗走す
- 大鳥都督以下深山幽谷を跋渉して米澤へ赴く
- 米澤へ到り要領を得ず檜原に帰り、木曾村に出陣す



■新旧混交で何とも珍妙な箱館戦争の洋式歩兵。(ブリュネ筆)

- 会津領木曾村附近の戦争
- 大鳥都督会津領引揚げ準備の事
- 大鳥都督会津領を引揚げ福島を経て仙台に到り榎本へ面会の上更に松島に到る
- 榎本釜次郎諸艦を率いて仙台領松島湾を発し 蝦夷島に向う
- 鷲木村より箱館へ進軍並びに峠下村の戦争
- 七重及び大野の戦争
- 我軍五稜郭忙入る
- 秋田藩の軍艦高雄丸捕獲の顛末
- 我軍松前城を攻撃し遂に之を陥るること
- 館の新城を攻撃すること並びに開陽艦の沈没
- 蝦夷平定総裁以下選挙、島内を巡視すること
- 南部領宮古湾の一戦
- 官軍乙部村へ上陸、松前、大野、木古内附近の戦争
- 二股の激戦味方の勝利、松前大戦味方の敗北
- 木古内の敗戦並びに大鳥都督馬乗にて茂地、當別を経て海岸に到る
- 失不來の戦事味方の敗軍
- 七重濱附近戦争味方勝利並びに大野、七重の戦争味方の破綻
- 箱館の激戦並びに我艦龍艦敵の朝陽艦を撃沈
- 薩藩の池田次郎兵衛箱館病院へ 来り恭順を説く
- 敵の俘虜送還並びに千代ヶ岡中島父子の戦死
- 官軍の参謀酒を五稜郭に送ること並びに榎本総裁自殺を計る
- 榎本以下箱館出発東京へ護送せらる
- 榎本以下糾問所にて取調べられ、揚屋入りのこと並びに獄中の苦辛
- 大鳥圭介出獄並びに欧米へ渡航のこと
- 大鳥公使日清談判
- 男爵大鳥圭介の薨去並びに葬儀
- 第二編 名士の談話
- 第三編 易〇及葬儀彙集
- 第四編 逸事
- 第五編 詩歌
- 補遺 大鳥圭介自伝(へすぐ左上に目次あり)
- 追録 教育論、俟素論、日清交際の将来など論壇と講演
- 被害の視察
- 会津の情態
- 会津仙台北本松頼むに足らず
- 石筵の苦戦
- 会津の危急
- 米沢の変心
- 若松の形勢
- 越後口の防戦
- 二本松城を抜かんとす
- 仙台に赴く
- 蝦夷地に向かうに決す
- 蝦夷地上陸
- 要害の視察
- 会津領に引揚ぐ
- 山越の艱難
- 会津領に入り兵を部署す
- 敵情を探る
- 小佐越の防戦
- 今市攻撃
- 今市の再攻撃
- 会津に赴く
- 藤原の滞陣
- 不在中の敗軍
- 藤原の防戦
- 白川の危急
- 松平薩摩守の功業
- 田町台場の築造
- 蘭学者の養成
- 薩摩の姫君幕府へ入奥の事情
- 精兵の養成
- 將軍東帰して城内に召さる
- 前將軍に謁して意見を述べ
- 兵を率いて江戸を脱走す
- 鹿沼に向かう
- 転じて宇都宮に赴く
- 壬生城侵襲
- 宇都宮の防戦
- 東照廟を拝す
- 今方の防衛準備
- 会津領に引揚ぐ
- 山越の艱難
- 会津領に入り兵を部署す
- 敵情を探る
- 小佐越の防戦
- 今市攻撃
- 今市の再攻撃
- 会津に赴く
- 藤原の滞陣
- 不在中の敗軍
- 藤原の防戦
- 白川の危急
- 裁上製箱入 A5判七百頁
- 価 一万五千元(税込・千別)
- 予約特価 一万二千元(税・千込)
- 予約締切 平成21年11月30日
- 発 売 平成22年1月中旬
- ▼書店不卸 ▼縮切厳守 ▼返本OK
- 「申込ハガキ」にあるセット特価をご利用下さい。
- 山口県周南市銀座2-13
- マツノ書店
- URL <http://www.matsuno.com>

## 大鳥圭介自伝

### 目次

- ・医者之家に生まる
- ・備前の閑谷塾に入る
- ・始めて洋学に志す
- ・緒方洪庵の塾に入る
- ・原書の欠乏と学費の欠乏
- ・医学を廃して兵学に移る
- ・江川の塾に聘せらる
- ・尼ヶ崎藩及び徳島藩に事ふ
- ・安政の大地震
- ・初めて金属活字を造る
- ・初めて英書を学ぶ
- ・初めて写真術を試みる
- ・幕府に事へて新式の兵制を定む

- ・松平薩摩守の功業
- ・田町台場の築造
- ・蘭学者の養成
- ・薩摩の姫君幕府へ入奥の事情
- ・精兵の養成
- ・將軍東帰して城内に召さる
- ・前將軍に謁して意見を述べ
- ・兵を率いて江戸を脱走す
- ・鹿沼に向かう
- ・転じて宇都宮に赴く
- ・壬生城侵襲
- ・宇都宮の防戦
- ・東照廟を拝す
- ・今方の防衛準備
- ・会津領に引揚ぐ
- ・山越の艱難
- ・会津領に入り兵を部署す
- ・敵情を探る
- ・小佐越の防戦
- ・今市攻撃
- ・今市の再攻撃
- ・会津に赴く
- ・藤原の滞陣
- ・不在中の敗軍
- ・藤原の防戦
- ・白川の危急

- ・要害の視察
- ・会津の情態
- ・会津仙台北本松頼むに足らず
- ・石筵の苦戦
- ・会津の危急
- ・米沢の変心
- ・若松の形勢
- ・越後口の防戦
- ・二本松城を抜かんとす
- ・仙台に赴く
- ・蝦夷地に向かうに決す
- ・蝦夷地上陸

限定三百部復刻(番号入)

体 裁上製箱入 A5判七百頁  
定 価 一万五千元(税込・千別)  
■予約特価 一万二千元(税・千込)  
■予約締切 平成21年11月30日  
■発 売 平成22年1月中旬  
▼書店不卸 ▼縮切厳守 ▼返本OK  
●「申込ハガキ」にあるセット特価をご利用下さい。  
山口県周南市銀座2-13  
マツノ書店  
URL <http://www.matsuno.com>